学 会 名	第55回日本看護学会学術集会 （2024年9月27日～29日）
研究テーマ	回復期病棟看護師における退院支援意識調査 ―認知症高齢者アセスメントツールを用いて―
病 院 名	医療法人喬成会 花川病院
演　　者	○形川久美子（看護師）

概　　要

【緒言】回復期リハビリテーション病棟（以下、回復期リハ病棟）において、認知症高齢者の退院後の生活を見据えたアセスメントツールはなく、堀井ら（2023）は認知症高齢者の自宅退院支援アセスメントツール（以下アセスメントツール）を作成した。【目的】本研究では、退院支援の質向上を図るために、先行研究で作成したアセスメントツールを活用し、看護師の退院支援に対する意識変化を調査する。【方法】1.202X年6月1日～8月31日までA病院回復期リハ病棟に入院した自宅退院を目指す65歳以上で、認知症高齢者の日常生活自立度Ⅱ以上を対象患者とした。退院支援経験のある看護師・准看護師が、アセスメントツールを用いて退院支援を実施。アセスメントツール使用前後に、アンケート調査を実施し、使用前を一次調査、使用後を二次調査とした。2.内容は基本属性、アセスメントツール使用件数、アセスメントツール使用前後の退院支援の意識変化、アセスメントツールの使用前後の項目確認頻度、アセスメントツールの追加検討項目3.分析は、アセスメントツール使用前後の2群間でウィルコクソン符号付順位和検定を行い、ｐ値は0.05未満を有意差ありとした。対象者には個人が特定されないよう匿名化することと情報の管理について、また、学術集会で研究報告することを書面で説明し、同意を得た。

【結果】対象看護師は43名（有効回答率93.5％）で、看護師経験10年以上、退院前訪問・後訪問の経験者が約70％だった。介入後は退院後の生活を見据えた退院支援を行えているという意識に、有意差はなかったが81％から67％に低下した。アセスメントツール使用前後では6分野（食事・排泄・身体機能・認知機能・医療・地域交流）8項目に有意差が認められた。栄養管理の項目のみ、アセスメントツールの確認が減少したが、それ以外は増加した。アセスメントツール使用は1件が61％だった。アセスメントツールを使うことが効果的であるという回答が半数以上あったが、使用回数が少なく、使いこなせていないとの意見もあった。アセスメントツール追加検討項目として、火の始末能力・金銭管理能力の有無が半数以上あった。【考察】介入後に退院後の生活を見据えた退院支援の意識が低下したのは、今まで経験を頼りに、退院支援を行っていたが、アセスメントツールを使用することで、今までの退院支援が不十分であることに気づいた為と考えられる。有意差のあった6分野は先行研究でも同様の結果であり、重要なアセスメント項目であることが示唆された。退院後の生活を見据えた食事環境・栄養管理方法を看護師が主体的に取り組む必要がある。【結論】アセスメントツールを活用することは退院支援に取りくむ看護師に意識変化があった。本研究では、アセスメントツール使用回数が少なく、使いこなせていない状況もあり、使用方法の勉強会を重ねていくことで、退院支援の質向上につながると考える。